

# 遠隔授業の取り組みへの関連要因の検討 —公正世界信念及び授業形態の好みに着目して—

沼田 真美  
(高等教育研究所)

## Examination of Factors Related to Distance Learning Initiatives: Focusing on the Just-world Belief and Preferences of Class Styles

Mami NUMATA  
(Research Institute for Higher Education)

本報告は、学生の遠隔授業への取り組みについて、公正世界信念及び学生の授業形態の好みに着目し、目的1では、学生の遠隔授業への取り組み（当該授業の理解度・興味・難易度・受講時の困難）と公正世界信念との関連、目的2では当該授業の希望授業形態と受講時の困難との関連及び授業一般に対する授業形態の好みの関連の検討を行った。授業実践事例として、本学専門科目「社会心理学特講4（集団）」の遠隔形式（オンデマンド型）を紹介し、83名の調査協力者を対象とした。相関分析の結果から、目的1では内在的公正世界信念と授業への興味との間に正の関連がみられ、目的2では受講時の困難と希望授業形態のオンデマンド型との間に負の関連がみられた。 $\chi^2$ 検定の結果から、希望授業形態としてオンデマンド型を希望の場合、授業一般の好みとして、対面形式が好みでないもしくはハイブリッド型が好みであるときに選択されていた。考察では、授業実践事例の特徴を踏まえて、得られた結果に関して議論が行われた。

キーワード：遠隔授業（オンデマンド型）、公正世界信念、授業形態の好み、受講時の困難、  
学生の理解度・興味

### はじめに

2020年度以降、多くの教育機関において、感染症対策のため、それ以前に主流であった対面形式の授業形態ではなく、遠隔形式の授業形態が全面的に選択され、本学でも同様の状況となった。その後、徐々に感染症の影響が縮小傾向となったため、本学においては、2022年度春学期より、全面的に対面形式での授業の実施が再開された。対面形式での授業の実施再開後、各キャンパス内では、登校した学生達の賑わいが戻り、感染症流行以前の見慣れた日常風景に次第に戻ることもとなった。本報告の事例で扱う科目においても、上記同様の授業形態で実施し

た。具体的には、2020年度及び2021年度は遠隔形式での授業実施となり、2022年度は、対面形式での授業が再開となった。

このような状況において、遠隔形式の授業実施初年度には、対面形式での授業の再開を望む学生の声度が度々みられた。学生は、これまで対面形式の授業しか受けたことのない者も多く、授業実施側の教員にとっても同様の状況であり、お互いに経験したことのない遠隔授業へ取り組む必要があった。

このような困難を乗り越え、2022年度には、対面形式での授業が再開となったが、遠隔形式での授業に慣れた学生達において、遠隔形式と対面形式の授業の違いに戸惑う様子もみられた。この違いの中

には、授業中に携帯を操作しない、授業開始前までに時間に余裕を持って登校するといった生活態度に関する内容も含まれる。このような学生の様子や、授業時のリアクションペーパー等での感想を通して、どちらの授業形態が優れているか、また望ましいかについて一概に判断することは困難と考えられた。いずれの授業形態においても、それぞれ利点や欠点が考えられ、各学生個人において、遠隔形式及び対面形式のいずれの授業形態を好ましいと感じるか、個人差がみられる可能性がある。さらに、学修目的によっても、適切な授業形態が異なる可能性がある。

前述の疑問に対する一つの視点を提供する研究として、前田・西山・沼田・峯村・矢野・武田(2022)による、本学学生を対象とした授業形態の違いの認識に関する調査結果がある。前田他(2022)は、同調査において、学生の各授業形態の良い点に関する認識として、遠隔授業では「リラックスさ」「自由さ」といった項目、対面授業では「寛容さ」「温かさ」といった項目が多くみられたことを報告した。また、前田他(2022)は、同調査において、遠隔授業に関する具体的な良い点として「自分の好きな場所で取り組める」「勉強が自分のペースでできる」を報告しており、一方、困った点について、「授業中、先生や友人にちょっとした確認や相談ができない」「集中力が続かない」といった項目を報告していた。これらの点に関して、対面授業時には、いずれも逆の現象が生じると考えられる。すなわち、対面授業時には、一般的に、学生は決められた教室において当該科目を受講し、授業進行速度は教員側で操作されるものである。一方では、授業中に周りの学生の学修の様子を通してどのように課題に取り組めばよいか分かるといったことや、学生の様子を踏まえた教員側の臨機応変な対応や、問いかけなどの相互作用により、集中力が維持されると推定される。

以上を踏まえると、遠隔授業の受講に関しては、自由な環境において、自分のペースで進められる一方、対面授業とは異なり、時間の拘束が緩くなる側面もみられるなど、集中力を維持しづらい可能性が考えられ、疑問を周囲や教員に気軽に尋ねることが難しいといった状況下での受講の様子が読み取れる。ただし、前田他(2022)では、遠隔授業で良かつ

たところとして「勉強が自分のペースでできる」項目が挙げられていた。同様の結果とし、著者の担当した遠隔授業(オンデマンド型)実施時に、何度も授業動画を繰り返し視聴できる点を評価する学生の感想が複数みられていた(Ⅱ2)。そのため、自由度の高い遠隔授業下においても、授業に真摯に取り組むことのできる学生の特徴を捉えることができれば、遠隔形式及び対面形式の授業内において、よりよい授業の運営に生かすことができると考えられる。

このような比較的自由度の高い遠隔授業下においても、授業に真摯に取り組む学生の心理的側面に関わると考えられる概念の一つに、公正世界信念が挙げられる。公正世界信念とは、「世界は突然の不運に見舞われることのない公正で安全な場所であり、人はその人にふさわしいものを手にしているとする信念」である(Lerner & Melvin 2013)。公正世界信念の下位概念のうち、特に、ある出来事が起こった原因を過去の行いによるものと信じる内在的公正世界信念が、授業に取り組む姿勢に最も関わると考えられる。これは、自分の行いが自分に返ってくるという信念の強い者において、自由度の高い環境下においても、学修目標を身に付けるためには、自らの授業へ真摯に取り組む態度が重要と考え、行動に結びつくとも推察されるためである。

一方、前田他(2022)の結果を踏まえると、遠隔授業と対面授業の利点・欠点の内容は大きく異なる。そのため、今回実施した遠隔授業の利点と実施していない対面授業の利点のどちらをより好むかという点について、学生の個人差がみられると考えられる。授業形態の学生の好みと実際の授業実施形態との組み合わせの一致・不一致は、当該授業の取り組み態度に関する理解の上で重要と考えられる。例えば、一致している場合、より授業形態の利点を生かした参加が可能になると考えられる一方、不一致の場合には、授業参加にあたり困難が生じる恐れがある。このため、学生の授業形態の好みと当該授業の希望授業形態について、今後の授業改善に役立てられるよう検討を行うこととする。

以上の議論を踏まえ、本報告では、学生の遠隔授業への取り組みについて、公正世界信念及び学生の授業形態の好みに着目して検討を行うことを目的とする。具体的には、目的1では、学生の遠隔授業へ

の取り組み（当該授業の理解度・興味・難易度・受講時の困難；以下同様）と公正世界信念との関連について検討し、目的2では、当該授業の希望授業形態と受講時の困難との関連及び授業一般に対する授業形態の好みの関連について検討する。本報告では、著者が担当する本学人間学部心理カウンセリング学科3年生以上を対象とした専門科目「社会心理学特講4（集団）」における遠隔形式（オンデマンド型）での授業実践内容を紹介し、検討を行うこととする。

## 1. 学修目標について

はじめに、当該科目の学修目標は、以下の3点である。第一に、社会心理学における集団に関する基礎知識を理解し、説明できるようになること、第二に、社会心理学分野で用いられる実験や調査の実施方法等を理解し、説明できるようになること、第三に、授業で学んだ知識について、日常生活に活かせるようになること、である。当該授業においては、理論や先行研究の知見を読み解くだけでなく、授業内で身近な具体例を挙げることにより、授業で扱う内容と日常生活との結びつきを意識し、実際に活用できる力を身に付けることを目標として、全15回の授業を展開した。

## 2. 講義の進め方について

遠隔授業の実施においては、主にパワーポイントに音声吹き込んで作成したオンデマンド型の動画配信を行い、振り返り課題の提出を求める、といった流れで進めた。また、授業動画で提示したスライドの一部をレジュメとしてまとめた資料を教材として配布し、補足的に適宜ワーク資料や論文を配布するというものであった。レジュメには、重要語句に関して、穴埋めを行うスライドが含まれており、ねらいとしては、学生が授業動画内で表示される重要語句を書き写すことで、集中力の維持を目指すものであった。ワーク資料では、授業内で扱う概念を測定する尺度等を用いることにより、授業内ワークを通して、体験に基づく当概念への深い理解を身に付けることを目指した。また、授業内容に関する質問は、課題内で受け付けており、個人的な内容以外は個別に対応するのではなく、翌週の授業冒頭で取り上げ、クラス全体に向けて質問内容の共有・回答・

補足を行っている。これは、質問の共有を通して、各個人の視点を越えた新たな視点をクラスメイトの質問を通して獲得することにより、様々な角度の観点から学修が可能になると考えられるためである。

課題の提出は、授業日翌日を締切りとし、リアクションペーパーとして感想や質問を記入するだけでなく、毎回2～3問程度、確認問題として当日の授業内で扱った重要語句に関する選択式の設問が含まれる。

遠隔形式での実施時には、本学の方針に沿って、Google Classroom を利用し、履修学生への連絡、教材配布、課題の提示等を行った。なお、授業実施側及び受講側双方の機器のトラブルによる影響を避ける目的に加え、当該科目の授業内容から判断し、リアルタイム型での実施ではなく、オンデマンド型の授業動画の配信による実施とした。

2021年度春学期に遠隔形式にて実施した当該科目の授業計画を【表1】に示す。

表1 2021年度の当該科目の授業計画

	内 容
第1回	社会心理学における集団とは何か オリエンテーション・集団とは・社会的アイデンティティ
第2回	集団の種類と内集団ひいき 集団の種類・内集団ひいきに関する理論と代表的な研究について
第3回	ステレオタイプ1 ステレオタイプの問題点と関連概念
第4回	ステレオタイプ2 ステレオタイプの変容・血液型ステレオタイプ
第5回	集団に関連する研究論文を読んでみよう 関連研究論文の結果を読み取る・検定の考え方
第6回	社会的影響 社会的影響とは・社会的促進・社会的手抜き
第7回	説得 説得とは・心理的リアクタンスの測定
第8回	第1回-第7回までのまとめと補足
第9回	応諾 応諾獲得方略の種類と代表的な研究について
第10回	同調行動 同調行動の種類と代表的な研究について
第11回	集団過程 集団過程とは・集団行動の特徴・集団意思決定
第12回	リーダーシップ リーダーシップに関する理論と代表的な研究について
第13回	集合行動とマスコミュニケーション 集合行動・マスコミュニケーション・情報の伝達
第14回	攻撃行動 攻撃行動に関する理論と代表的な研究について
第15回	全体のまとめと補足

なお、ワーク資料の活用について、授業動画内の指示による個人ワークとして実施した。遠隔形式時の工夫として、対面実施時は口頭での説明が主であった論文解説について、授業動画内の画面上で読み取りのポイント箇所を視覚的に明示し、個人ワークであっても理解を深められるように実施した。【図1】

Table 3  
各項目の平均値と標準偏差 (2004年アメリカ)

	人数 (n)				有意性 検定	効果量 ( $\eta^2$ )
	A (N=1,013-1,032)	B (N=448-457)	AB (N=221-228)	O (N=1,345-1,370)		
1. 日頃の生活の中で充実感を感じている	3.83 (0.88)	3.77 (0.87)	3.75 (0.86)	3.74 (0.85)	ns	.0015
2. ほかの人の生活水準を意識している	3.70 (0.99)	3.73 (1.05)	3.87 (1.05)	3.66 (0.90)	$p=.034$	.0028
3. 他人との生活水準の差は、2、3年前と比べて大きくなった	3.02 (0.90)	3.00 (0.90)	3.00 (0.90)	3.00 (0.90)	ns	.0007
4. 一旦、高い生活水準を味わうと、それを下げるのは苦痛だ	3.15 (1.03)	3.15 (1.03)	3.15 (1.03)	3.15 (1.03)	ns	.0005
5. 楽しみは後にとっておきたい	2.84 (1.06)	2.85 (1.06)	2.85 (1.09)	2.85 (1.09)	ns	.0008
6. 自分はや	2.58 (0.93)	2.61 (0.94)	2.59 (0.92)	2.60 (0.93)	ns	.0001
7. 金	3.63 (0.96)	3.58 (0.92)	3.68 (0.97)	3.62 (0.99)	ns	.0004
8. お金を貯めることが人生の目的だ	2.89 (0.91)	2.98 (0.92)	2.99 (0.91)	2.95 (0.90)	ns	.0008
※平均値とSDが記載されており天井効果・床効果の計算も可能					ns	.0017

注: 平均値とSDが記載されており天井効果・床効果の計算も可能

非有意 (ns) : not significant

$p$ 値  
 $p < .05$  (5%水準で有意)  
 $p < .01$  (1%水準で有意)

図1 論文解説における視覚的な説明の提示

### 3. 遠隔形式における教材開発と指示の工夫

当該科目の教材配布は、Google Classroomを通して、該当の授業回のトピック内にて、各自ダウンロードを行えるように設定した。基本的に、配布した資料については、印刷を推奨したが、印刷環境も各学生によって異なることが考えられたため、印刷必須とはせず、任意とした。そのため、PDFの資料配布の場合には、適宜、別途ノート等に必要事項

のメモを取ることを指示した。

【図2】は、PDFで配布したレジюме資料の一部である。学生は、授業動画の指示に沿って重要語句の穴埋めを行うことを通し、集中力の維持が可能になると考えられた。学生自らの作業スピードに合わせて動画を止めながら取り組むことができる点は、遠隔形式の利点といえる。

【図3】は、PDFで配布したワーク資料の一部である。遠隔形式時には、レジюме資料と同様に、印刷を任意とし、配布した。

個人ワーク実施時には、1人でも戸惑うことのないよう、ワーク資料の記入箇所の視覚的な提示を適宜行いながら手順に関する説明を行った。ワーク所要時間は、学生自らの作業スピードに合わせて動画を止めながら取り組むことができる点は、レジюме資料の穴埋めと同様に利点といえる。

また、論文の読み取り方等、対面形式時には口頭にて多く補足を行っていた授業内容に関して、遠隔形式時には、パワーポイント画面に図示することによって、授業動画内で視覚的にも重要箇所を分かりやすく明示することを意識した。例年、論文の読み取り方について、苦手意識のある学生も多くみられていた。対面形式であれば、周りの学生とお互いに口頭で補足しあいながら進められる部分について、遠隔形式のオンデマンド型では、困難になる学生もいると考えたためである。対面形式時には、印刷した論文を配布していたため、遠隔形式時には、論文PDFを配布し、印刷は任意とした。各自の印刷環境等の事情によって、手元に印刷した論文を用意することが難しい学生に対しては、PC上で画面の半

**社会的影響:** 意図が存在しない場合

3) ( ) helping behavior: 

他の人の利益になるように自発的に行われる行動

例) ・親切  
・臓器提供  
・ボランティア

・献血や募金  
・人助け  
・災害時の救助

⇒ 向社会的行動 (prosocial behavior: 他者の利益になる利他的行動全体の総称) の代表

**援助行動◆規定因** 

◆規定因

1) 援助行動と ( )

・援助行動をよくする人とならない人之间には何らかのパーソナリティ特徴の差があるのだろうか

\* 援助行動傾向とパーソナリティとの関連 (ラッシュンRushton, 1984)

・方法: 200名の大学生を対象とした自己報告式質問紙

・結果: 援助行動傾向との関連

① 正の相関 (社会的責任性・共感性・擁護欲求)

② 負の相関 (マキャベリズム)

※ただし、向社会的行動傾向を規定する割合はいずれも5%以下

図2 レジюме資料の様子一例

集団アイデンティティの測定

ワーク：  
あなたが所属する集団について、普段どのように感じているか、あなたの集団へのかかわり方をお尋ねします。特定の集団を挙げた後、以下の文について、あなた自身にもっともあてはまるものを選んでください。

◆A：あなたが所属する「特定の集団」を1つ挙げてください。  
特定の集団「A」：\_\_\_\_\_

◆B：あなたが所属する「特定の集団」をもう1つ挙げてください。  
特定の集団「B」：\_\_\_\_\_

(AとBで○をつけるペンの色を変えるなどして、ご自身で分かるようにお答えください)

	あてはまらない	ややあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる
1 私はこの集団の中心にいる	1	2	3	4	5
2 私はこの集団の価値ある一員だ	1	2	3	4	5
3 私はこの集団らしいタイプの人間だと思う	1	2	3	4	5
4 私は自分の集団に対して貢献できるものをあまりもっていない*	1	2	3	4	5
5 私は集団の中で自分が果たしている役割に満足している	1	2	3	4	5
6 この集団に所属していることは、私のイメージを決定する重要な要素	1	2	3	4	5

図3 ワーク資料の様子例

分に論文PDF、もう半分に授業動画を提示し、論文PDF上に直接マーカーを引くなどして、対応するように指示を出した。このように遠隔形式時には、授業理解の観点において、印刷環境に左右されないように配慮を行った。

授業動画を視聴後に Google フォームにて課題の提出を毎回求めた。課題の主な内容は、授業動画内で触れた内容に関する選択式の確認問題2～3問、当該回の授業内容に関する感想（100～200文字程度）、授業内容に関する質問（任意）であった。次回の授業内にて、課題のフィードバック及び感想・質問内容の共有及び回答を行ったが、これは、遠隔形式であっても、画面の向こう側に教員やクラスメイトがいることを意識し、一体感を持って授業に取り組めるようにというねらいのもとに実施した。

その他、YouTubeの映像や、Googleドライブの利用を通して、遠隔形式であっても、学生が授業に取り組みやすい環境づくりを心掛けた。遠隔形式時の毎回の受講手順に関して、学生への指示内容として、Google Classroom上の当該回のトピック内に、手順を明示した。学生からの質問に対しては、Google Classroom内の限定コメントや学内メール等にて対応を行った。

#### 4. 遠隔形式における各回授業実施概要と課題提出率

遠隔形式の授業は、【表1】に示した通りに実施した。ここでは、各回の授業実施概要の特徴と振り返り課題の提出率について記述する。授業実施概要

の特徴としては、「3. 遠隔形式における教材開発と指示の工夫」で触れたように、オンデマンド型での実施ではあったものの、「レジュメ資料 (PDF)」「ワーク資料 (PDF)」「論文資料 (PDF)」「映像資料 (YouTube 等)」の配布・利用を行った部分である。授業ごとに使用する資料等の組み合わせは異なっていたため、【表2】に資料の組み合わせ及び学生の課題提出率について示した。課題提出率は、いずれの組み合わせにおいても概ね80%を超えていた。

表2 各回の授業における利用教材と課題提出率 (n = 106)

	レジュメ	課題	ワーク	論文	映像	課題提出率
1	○	○	○			94.3%
2	○	○	○	○	○	91.5%
3	○	○	○	○		84.9%
4	○	○	○	○		87.7%
5	○	○				80.2%
6	○	○				84.9%
7	○	○				90.6%
8	○	○				84.0%
9	○	○		○	○	81.1%
10	○	○		○	○	79.2%
11	○	○			○	84.9%
12	○	○		○	○	83.0%
13	○	○		○		86.8%
14	○	○		○		85.8%
15	○	○		○		80.2%
	100.0%	100.0%	26.7%	60.0%	33.3%	85.3%

#### 5. 授業改善のためのアンケート調査の実施方法

第14回目の授業実施後に、Googleフォームを利用して、「授業改善のためのアンケート」を実施した。

##### (1) 調査参加者及び調査時期

当該科目の受講者106名のうち、「授業改善のためのアンケート」に協力してもよいと回答した83名を対象とし、オンライン上Googleフォームを利用して、自記入形式の質問紙調査を実施した（有効回答率78.3%）。調査時期は2021年度8月であった。

##### (2) 倫理的配慮

倫理的配慮の内容として、APA論文作成マニュアル（American Psychological Association, 2009；前田・江藤・田中訳 2011）及び本学の研究倫理委員会倫理規定に準じているかの観点から、以下の点を踏まえて検討し、匿名かつ任意の調査であるため、問題がないことを確認した。具体的には、インフォ

ムド・コンセントを得ること、個人情報に関する守秘義務を徹底すること、利益相反に関わる項目が含まれていないこと、使用した既存尺度に関して侵襲性が報告されていないことである。参加協力者に対して、匿名かつ任意での回答であること、回答の拒否や中止は自由であり、これらによって不利益が生じないことを説明し、同意する場合のみ回答を求めた。

### (3) 質問項目

今回の調査で使用した設問内容は以下の通りである。(a) 当該授業全体の理解度「社会心理学特講4(集団:全15回)の授業全体について、あなたの理解度をお答えください」(4件法:理解した・どちらかといえば理解した・どちらかといえば理解していない・理解していない)(b) 当該授業全体の内容への興味「社会心理学特講4(集団:全15回)の授業全体について、あなたが興味を持った内容がありましたか」(4件法:あった・どちらかといえばあった・どちらかといえばなかった・なかった)(c) 当該授業全体の難易度「あなたにとって、社会心理学特講4(集団:全15回)の授業の難易度はいかがでしたか」(5件法:難しかった・どちらかといえば難しかった・適切だった・どちらかといえば易しかった・易しかった)(d) 当該授業受講時の困難「本授業は、「オンライン授業・オンデマンド型(動画及び資料の配信)」での授業実施となりましたが、対面授業と比べて、受講のうえで、困ったことや大変だったことはありましたか」(4件法:あった・どちらかといえばあった・どちらかといえばなかった・なかった,理由に関する自由記述(任意))(e) 授業一般に対する好みの程度「授業の実

施形態のそれぞれの好みについて教えてください(本授業に限らず、全体的な好み)」(対面授業・オンライン授業同時双方向型(Zoomなど・オンタイムで参加;以下同様)・オンライン授業オンデマンド型(Google Classroomなど・動画や資料の配信;以下同様)・ハイブリッド授業(対面授業とオンライン授業の混合;以下同様))(4件法:好みである・やや好みである・あまり好みではない・好みではない)(f) 当該授業の希望実施形態「本授業の実施形態を選べたならば、以下のうちあなたが希望する授業形態をお答えください」(単一選択:対面授業・オンライン授業同時双方向型・オンライン授業オンデマンド型・ハイブリッド授業,理由に関する自由記述(任意))(g) 公正世界信念尺度(村山・三浦,2015):内在的公正世界信念4項目(「どんな人であっても自分の働いた悪事の報いはいつか受けるものである」等)、究極的公正世界信念4項目(「苦しみを抱えたすべての被害者が報われる日はやがて来る」等)、不公正世界信念4項目(「世の中の大抵のことは不公平だ」等)の3下位尺度(6件法)

### (4) 分析

分析には、HAD12.216(清水・村山・大坊,2006)を用いた。

## 6. 調査結果

### (1) 各変数の回答内容割合

授業への取り組みに関する設問全体像の把握のため、当該授業に関する設問の各選択肢の割合について、【図4】に示す。その結果、授業全体の理解度は「はい」「どちらかといえばはい」を合わせた肯定率100.0%となった。続けて、授業全体への興

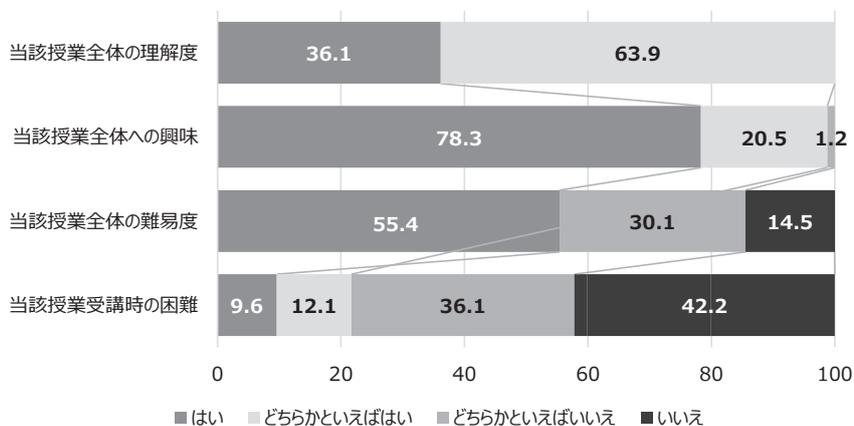


図4 当該授業に関する設問の各選択肢割合

味の肯定率は 98.8%、授業全体の難易度の肯定率は 55.4%、受講時の困難の肯定率は 21.7% であった。

また、授業一般に関する授業形態の好みの各選択肢の割合について、【図 5】に示す。その結果、対面授業は、「好みである」「やや好みである」を合わせた肯定率 67.5% であった。続けて、オンライン同時双方型授業の肯定率は 16.9% であり、オンライン授業オンデマンド型の肯定率は 98.8%、ハイブリッド授業の肯定率は 42.1% であった。

(2) 記述統計量と各変数間の相関関係

目的 1 の検討にあたり、得られた各変数の平均値、標準偏差を算出し、公正世界信念尺度に関しては、 $\alpha$  係数を確認したところ、全ての下位尺度において、十分な内的一貫性が示された ( $\alpha_s = .74-.87$ )。各変数の記述統計量及び当該授業の指標となる変数 (表 3 の 1・2・3・4) との相関係数を示す【表 3】。

その結果、当該授業全体の理解度は、当該授業全体の興味との間に弱い正の相関 ( $r = .33, p < .01$ )、オンライン授業オンデマンド型の好みとの間に弱い正の相関 ( $r = .28, p < .01$ ) がみられた。当該授業全体の興味は、究極的公正世界信念との間に弱い正の相関 ( $r = .24, p < .05$ )、内在的公正世界信念との間に弱い正の相関 ( $r = .38, p < .01$ ) がみられた。当該授業受講時の困難は、オンライン授業オンデマンド型の好みとの間に弱い負の相関 ( $r = -.38, p < .01$ ) がみられた。

(3) 当該授業の希望授業形態と受講時の困難との関連

目的 2 の検討にあたり、当該授業の希望授業形態について、割合を算出したところ、「オンライン授業オンデマンド型」(62.7%)、「対面授業」(18.1%)、「ハイブリッド授業」(14.5%)、「オンライン授業同

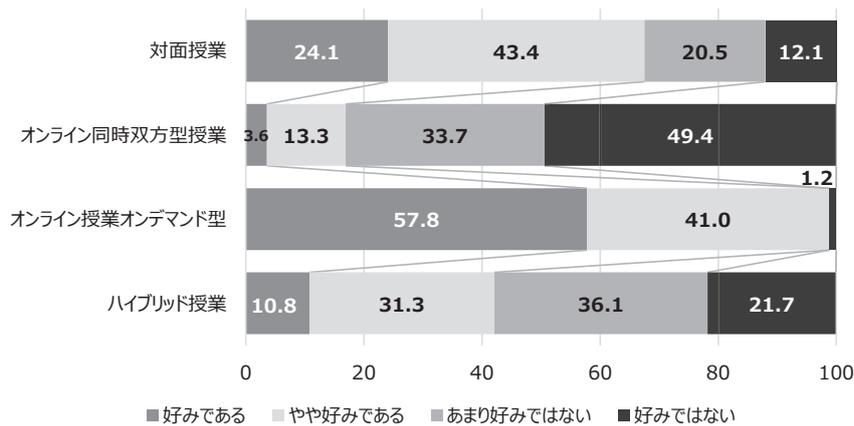


図 5 授業一般の授業形態の好みに関する設問の割合

表 3 本調査で実施した項目に関する記述統計量一覧 (n = 83)

	Mean	SD	1	2	3	4
(当該授業に関する設問)						
1 当該授業の理解度	3.36	0.48	—	—	—	—
2 当該授業の興味	3.77	0.45	.33**	—	—	—
3 当該授業の難易度	3.59	0.73	.01	.01	—	—
4 当該授業受講時の困難	1.89	0.96	-.21	.08	.06	—
(授業一般に関する設問)						
5 対面授業の好み	2.80	0.95	-.21	.12	.05	.19
6 オンライン同時双方型授業の好み	1.71	0.83	.17	.21	-.08	-.09
7 オンライン授業オンデマンド型の好み	3.55	0.57	.28**	-.07	-.06	-.38**
8 ハイブリッド授業の好み	2.31	0.94	-.17	-.17	-.08	.02
(公正世界信念の測定)						
9 究極的公正世界信念	3.20	1.15	-.12	.24*	.01	.21
10 内在的公正世界信念	4.02	1.01	-.13	.38**	.06	.16
11 不公正世界信念	4.52	0.87	.19	.04	.01	-.07

注 1) 1-2・4-8 は、4 件法、3 は、5 件法、9-11 は 6 件法で尋ねた  
 注 2) \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

時双方型」(4.8%)との結果となった。当該授業の希望授業形態と受講時の困難との関連を検証するために、 $\chi^2$ 検定を行ったところ、有意な関連がみられた( $\chi^2(9) = 28.64, p < .01$ )。残差分析(標準化ピアソン残差)を行った結果を【表4】に示す。希望する授業形態が「オンライン授業オンデマンド型」において、受講時の困難が「なかった」と回答した者が期待度数より有意に多く( $p < .05$ )、反対に、「あった」( $p < .01$ )「どちらかといえばあった」( $p < .05$ )と回答した者が有意に少ないことが示された。また、希望する授業形態が「対面授業」において、受講時の困難が「あった」と回答した者が期待度数より有意に多く( $p < .01$ )、反対に、「どちらかといえばなかった」と回答した者が有意に少ないことが示された( $p < .05$ )。

また、希望受講形態の理由について自由記述にて尋ねた結果、「オンライン授業オンデマンド型」を選んだ者においては、「何度も授業動画を見返すことができ、一度では理解の難しい概念について、自分のペースで考えることができたから」「対面でのリスクを冒さずとも十分に理解できる内容であったから」などの意見がみられた。「対面授業」を選んだ者においては、「友人と意見を交わしながら理解を深めたい内容があった」「オンライン授業はどうしても集中力が切れやすいと感じたから」「対面授業が最も理解度が高いと思うから」などの意見がみられた。「ハイブリッド授業」を選んだ者においては、「尺度の測定を実際に行うワークや、実験的な内容の場合には、対面で受講したいと思ったから」「コロナの状況もあるので、毎回ではなくてもいいが、授業内容によっては対面の方が理解できるといった

から」などの意見がみられた。「オンライン授業同時双方型」を選んだ者においては、「登校するには不安があるが、オンデマンド型だとしても集中力が切れてしまうため」「オンライン授業の場合には同時双方向型の方が質問しやすいと思ったから」などの意見がみられた。

受講時の困難の理由としては、「授業後に気軽に先生に直接質問しに行けない点。質問欄への入力ハードルが上がる」「対面授業よりも、学んだぞという達成感が薄くなってしまった」「資料を印刷しないといけなかったから」「グループワークをやりたかったから」「課題の内容がよく分からなかったときに一人は大変だった」などの意見がみられた。

#### (4) 授業形態の好みと当該授業の希望授業形態との関連

目的2の検討にあたり、授業形態の好みと当該授業の希望授業形態との関連を検証するため、授業一般の授業形態(対面形式・オンライン同時双方向型・オンラインオンデマンド型・ハイブリッド型)の好みの程度について、「好みである群」(好みである・やや好みである)と「好みでない群」(あまり好みではない・好みではない)の2群について、 $\chi^2$ 検定を行った。その結果、「授業一般・対面形式」「授業一般・オンライン授業同時双方型」「授業一般・ハイブリッド型」との間に有意な関連がみられた(順に、 $\chi^2(9) = 28.64, p < .01$ 、 $\chi^2(9) = 28.64, p < .01$ 、 $\chi^2(9) = 28.64, p < .01$ )。残差分析(標準化ピアソン残差)を行った結果を【表5】に示す。

授業一般について「対面形式・好みである群」において、当該授業の希望授業形態が「対面形式」と回答した者が期待度数より有意に多く( $p < .01$ )、

表4 希望授業形態と受講時の困難に関するクロス集計および残差分析の結果 (n = 83)

(受講時の困難度)		授業形態			
		対面授業	同時双方向型	オンデマンド型	ハイブリッド型
あった	観測度数	5 (62.5)	1 (12.5)	0 (0.0)	2 (25.0)
	残差	3.44**	1.07	-3.85**	0.89
どちらかといえばあった	観測度数	4 (40.0)	1 (10.0)	3 (30.0)	2 (20.0)
	残差	1.92	0.82	-2.28*	0.53
どちらかといえばなかった	観測度数	2 (6.7)	0 (0.0)	22 (73.3)	6 (20.0)
	残差	-2.03*	-1.54	1.51	1.08
なかった	観測度数	4 (11.4)	1 (5.7)	27 (77.1)	2 (5.7)
	残差	-1.34	0.33	2.33*	-1.93

注1) 括弧内は受講時の困難度における該当件数の割合 (%)

注2) \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

表5 希望授業形態と授業一般への好みに関するクロス集計および残差分析の結果 (n = 83)

(授業一般の好み)		希望の授業形態				
		対面授業	同時双方向型	オンデマンド型	ハイブリッド型	
対面形式	好みである群	観測度数	15 (26.8)	2 (3.6)	29 (51.8)	10 (17.9)
		残差	2.97**	-0.76	-2.95**	1.27
	好みでない群	観測度数	0 (0.0)	2 (7.4)	23 (85.2)	2 (7.4)
		残差	-2.97**	0.76	2.95**	-1.27
同時双方向型	好みである群	観測度数	5 (35.7)	4 (28.6)	2 (14.3)	3 (21.4)
		残差	-2.29*	4.56**	-0.02	0.36
	好みでない群	観測度数	47 (68.1)	0 (0.0)	10 (14.5)	12 (17.4)
		残差	2.29*	-4.56**	0.02	-0.36
オンデマンド型	好みである群	観測度数	14 (17.1)	4 (4.9)	52 (63.4)	12 (14.6)
		残差	-2.14*	0.23	1.30	0.41
	好みでない群	観測度数	1 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
		残差	2.14*	-0.23	-1.30	-0.41
ハイブリッド型	好みである群	観測度数	17 (48.6)	1 (2.9)	12 (34.3)	5 (14.3)
		残差	-2.26*	-0.71	4.39**	-0.77
	好みでない群	観測度数	35 (72.9)	3 (6.3)	0 (0.0)	10 (20.8)
		残差	2.26*	0.71	-4.39*	0.77

注1) 括弧内は希望授業形態各群における該当件数の割合 (%)

注2) 「好みである」群の内訳 = 好みである・やや好みである, 「好みでない」群の内訳 = 好みでない・あまり好みでない

注3) \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ 

反対に、「オンデマンド型」( $p < .01$ )と回答した者が有意に少ないことが示された。また、「対面形式・好みではない群」において、当該授業の希望授業形態が「オンデマンド型」と回答した者が期待度数より有意に多く( $p < .01$ )、反対に「対面形式」( $p < .01$ )と回答した者が有意に少ないことが示された。

授業一般について「同時双方向型・好みである群」において、当該授業の希望授業形態が「同時双方向型」と回答した者が期待度数より有意に多く( $p < .01$ )、反対に、「オンデマンド型」( $p < .05$ )と回答した者が有意に少ないことが示された。また、「同時双方向型・好みではない群」において、当該授業の希望授業形態が「オンデマンド型」と回答した者が期待度数より有意に多く( $p < .05$ )、反対に「同時双方向型」( $p < .01$ )と回答した者が有意に少ないことが示された。

授業一般について「ハイブリッド型・好みである群」において、当該授業の希望授業形態が「同時双方向型」と回答した者が期待度数より有意に多く( $p < .01$ )、反対に、「オンデマンド型」( $p < .05$ )と回答した者が有意に少ないことが示された。また、「ハイブリッド型・好みではない群」において、当該授業の希望授業形態が「オンデマンド型」と回答した者が期待度数より有意に多く( $p < .05$ )、反対に「ハイブリッド型」( $p < .01$ )と回答した者が有

意に少ないことが示された。

## 7. 考察

本研究の目的は、学生の遠隔授業への取り組みについて、公正世界信念及び学生の授業形態の好みに着目して検討を行うことであった。目的1では、学生の遠隔授業への取り組みと公正世界信念との関連について検討し、目的2では、当該授業の希望授業形態と受講時の困難との関連及び授業一般に対する授業形態の好みの関連の検討を行った。以下で、検証の結果について考察する。

### (1) 遠隔授業への取り組みと公正世界信念との関連について

第一の目的の検討において、授業の取り組みの関連の検討にあたり、特に、ある出来事が起こった原因を過去の行いによるものと信じる内在的公正世界信念が、授業に取り組む姿勢に最も関わると推測した。相関係数を算出したところ、当該授業全体の興味は、内在的公正世界信念との間に弱い正の相関がみられた。一方、当該授業全体の理解度と内在的公正世界信念との間には、有意な関連はみられなかった。このため、自分の行いが自分に返ってくるとの信念の高い者において、授業への興味は高く持つものの、理解度には関係がみられないことが示された。ただ、今回の調査において、学修目標の達成度等、

授業への取り組みの指標として、より直接的な内容の変数を測定しておらず、引き続き検討が必要であると考えられる。また、当該授業全体の理解度と関連がみられなかった理由の一つとして、今回はオンデマンド型にて実施したが、図6に示したように、受講時に困難を感じた学生が2割程度みられた。表4の結果の通り、受講時に困難を感じた学生は、希望授業形態としてオンデマンド型を選択する割合が有意に低くみられており、今回の授業の実施形態が理解度に負の影響を及ぼした可能性も考えられる。

## (2) 希望授業形態と授業形態の好みとの関連について

第二の目的の検討において、図5に示す通り、授業一般の授業形態の好みに関して、ほぼ全ての学生が今回当該授業の実施形態である、オンデマンド型に対して、肯定的な回答を行った。表5では、当該授業の希望授業形態と授業一般への好みについて検討を行ったが、これらが不一致となった組み合わせがみられた。当該授業において「対面形式」を希望する者は、同時双方向型・オンデマンド型・ハイブリッド型がそれぞれ好みでない場合に有意に多くみられていた。また、「オンデマンド型」を希望する者は、対面形式が好みでない場合及びハイブリッド型が好みである場合に、有意に多くみられていた。このため、今回オンデマンド型で実施したことを踏まえると、ハイブリッド型に準ずるような形で、オンライン上において教員と学生間でのコミュニケーションは一定程度行うことはできたが、対面形式が好みである学生にとっては、受講のしにくさが残ってしまった可能性が考えられる。これは当該授業の特徴による影響も考えられるが、対面形式は、他の授業形態で完全には補うことが難しいものとして捉えられているようである。また、表3では、今回オンデマンド型で実施した当該授業の受講時の困難が高い者ほど、授業一般に関してオンデマンド型授業は好まないという結果がみられた。また、自由記述の結果において、他の授業形態と比較してオンデマンド型での対応に限界が考えられる内容もみられた。各学生の受講環境が一定ではないことを念頭に置き、各学生がスムーズに受講環境を整えられるよう、科目担当として心掛けていきたい。具体的には、当該授業の運営において、オンデマンド型で

あっても気軽に質問ができるよう、毎回、感想欄及び質問欄を設けて学生の様子を把握する、メールでの個別質問対応に応じるなど、授業形態の壁をできる限り取り除けるよう、学生の視点に立った対応を引き続き心掛けていきたい。

## おわりに

本稿では、2021年度におけるオンライン授業オンデマンド型で実施した「社会心理学特講4(集団)」の授業概要について報告した。授業一般におけるオンデマンド型への好みは、ほぼ全ての学生が肯定的に捉えていたが、受講時に困難なことがあった学生においては、希望授業形態をオンデマンド型とした学生は少なかった。当該授業においては、3年生以上の学生を対象とした専門科目であることもあり、教材の種類を多く用いて準備を行っていた。しかし、対面形式時には、印刷した資料について、順を追って手渡しを行い、学生の様子を踏まえて、口頭での補足や身振り手振りを交えた説明を行っていたため、オンライン上で一度にダウンロードする形と比較すると、資料の説明に対する情報量が不足した可能性及び授業全体の難易度にも影響した可能性が考えられる。一方、授業全体の理解度や、興味に関しては、ほぼ全ての学生が肯定的な回答をしており、対面形式と同様に授業の質を保つことができたと考えられる。

遠隔形式の授業実施を通して、以前よりも柔軟な授業方法や対応が可能になったという肯定的な側面を意識するとともに、授業形態の違いにおける利点や欠点をより注意深く捉えつつ、よりよい授業づくりや学生の授業形態の好みに沿った円滑な対応を行うなど、効果的に学生の学修目標の達成を目指す必要があるだろう。

## [謝辞]

本論文の執筆にあたり、貴重なご助言をくださった今野 裕之先生(目白大学)に深く感謝申し上げます。

## 《引用文献》

American Psychological Association (2009)

- 『Publication manual of the American Psychological Association (6th ed.)』 Washington DC: American Psychological Association. (アメリカ心理学会 前田 樹海・江藤 裕之・田中 建彦 (訳) (2011)『APA 論文作成マニュアル 第2版』医学書院)
- Lerner, J., Melvin (2013) 『The Belief in a Just World: A Fundamental Delusion (Critical Issues In Social Justice)』 Springer
- 前田 ひとみ・西山 里利・沼田 真美・峯村 恒平・矢野 秀典・武田 篤 (2022) 『目白大学授業向上力のためのハンドブック vol.2 アクティブ・ラーニング実例集 2022 遠隔授業編』 目白大学高等研究所
- 村山 綾・三浦 麻子 (2015) 「被害者非難と加害者の非人間化——2種類の公正世界信念との関連——」 『心理学研究』, 86, 1-9.
- 清水 裕士・村山 綾・大坊 郁夫 (2006) 「集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析 (1) —コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用—」 『電子情報通信学会技術研究報告』, 106, 1-6.

(受付日：2022年10月17日、受理日：2023年1月23日)